岡山県立博物館だより

39号
1月20日
1993

「日本の刀－その美と変遷」－備前刀・備中刀を中心に－

―― 平成4年度　特別展の開催にあたって ――

館長　橋本泰夫

岡山県立博物館では、平成4年度特別展「日本の刀」－その美と変遷－を、平成5年1月30日から2月28日まで1か月間にわたり開催することになりました。

本県は古くから刀剣の生産地として知られ、特に平安時代末期から鎌倉時代にかけては日本刀の代表作と云われる「名物大包平（おおがねひら）」をはじめとして数かずの名刀が製作されております。今回、日本刀の美とその変遷をテーマに刀剣としては開館以来始めて開催するこの特別展は、日本刀とかかわりの深い地元博物館として大変意義ある催しであると考えております。

一般的には刀剣は武器として発生し、その時代の戦闘様式に対応しながら、攻撃用武具としての完璧さを求めて形状を変え、質を高めるなど発達してきました。日本ではその過程で、刀剣に神秘的なものが宿るとし、また武士の精神を象徴するものとして工芸技術の粋を注ぎ込むなど作刀技術が高められていきました。その結果、今日では洗練された姿、鍛えられた地鉄（じかね）、美しい刃文などから鉄の美術工芸品として高く評価されています。

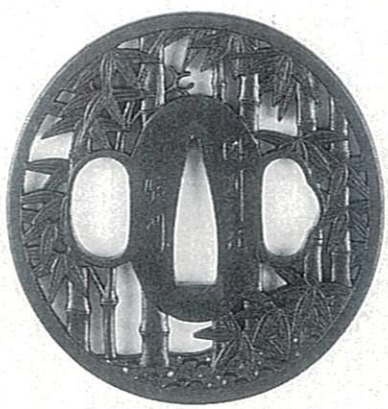
日本における刀剣の歴史は、鉄製品が初めて我が国にもたらされ弥生時代に利器として入ったものが最初であろうと考えられます。そして我が国で本格的な刀剣製作が始まるのは5世紀頃からで、7世紀から8世紀にかけて鍛練、焼入れなど日本刀の基本的な作刀技術が確立されます。しかし形状は返（そ）りのない大刀で、現在一般的に日本刀と云われる鎬造（しのぎづくり）の彎（わん）刀が出現するのは、数百年を経た平安時代後期にさがるものと思われます。

岡山県における作刀について具体的にさかのぼられるのはこの時代までですが、しかし県下各地で発見される6世紀後半から8世紀にかけての古代製鉄炉による鉄生産や、「和名抄（わみょうしょう）」にみられる由計比（ゆけひ）（靫負）の郷名からうかがわれる現邑久郡辺りの武器製作集団の存在などでそれ以前からも盛んであったことが考えられます。加えて鉄生産地と鍛刀地が河川によって直結されていたこと、鍛練に使用する赤松炭が入手し易かったこと、さらにまた、「一遍上人聖絵」福岡の市の場面にみられるように、海路・陸路により消費地とが容易に結ばれていたことなどから、日本刀の生産地として繁栄をみたと考えられます。

現在、備前刀・備中刀で国宝に指定されているものは52口、重要文化財は336口あり、国宝・重要文化財の約半数を占めており質的にも勝れた生産地であったことを裏付けています。砂鉄や赤松炭にみられる素材の優秀さもさることながら、何よりもそれを製作した刀工の技術力、美意識の確かさがあると思います。さらにその底流には、それらを育んだ恵まれた風土に加え、古代吉備文化の伝統をひく地域の文化性の高さがあることは確かでしょう。

この特別展「日本の刀」－その美と変遷－は、刀剣のみならず、刀装具、古文書、絵画、製作工程なども幅広く展示しておりますが、これらを通して多くの方々が、日本刀の美とその変遷と、あわせて我が国の歴史・文化の流れを理解してくだされば幸いであります。

終わりになりましたが、今回の展覧会への出品を快く御承諾下さいました所蔵者の方々をはじめ、御協力を賜りました皆様に心から御礼申しあげます。



鐔　　因州住駿河作　　岡山・個人蔵

平成４年度　特別展

「日本の刀－その美と変遷」

―備前刀・備中刀を中心に―

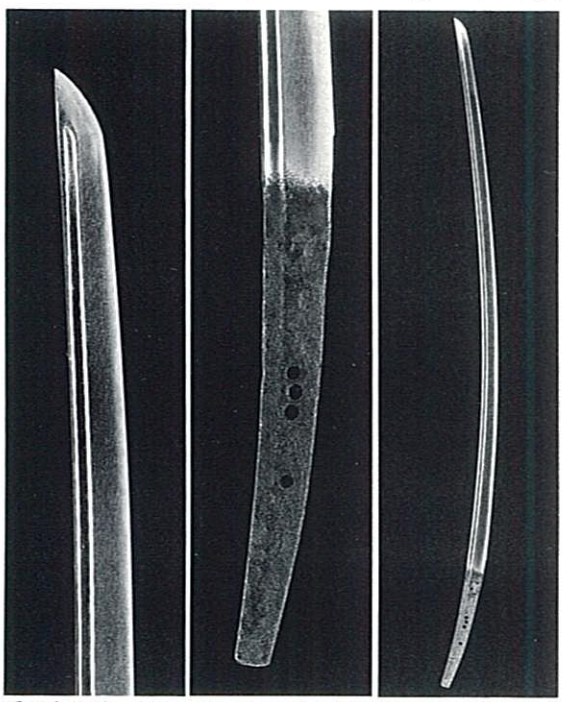
平成5. 1. 30～2. 28

鉄の芸術品ともいわれる、鎬と反りをもつ日本刀が誕生したのは、平安時代後期であったとみられているが、日本の刀剣史の上では、この頃から安土桃山時代にかけて作られた刀剣を古刀と呼び、それ以前のものを上古刀、江戸時代のものを新刀、同末期のものを新々刀、明治以後のものを現代刀と呼んで区別している。

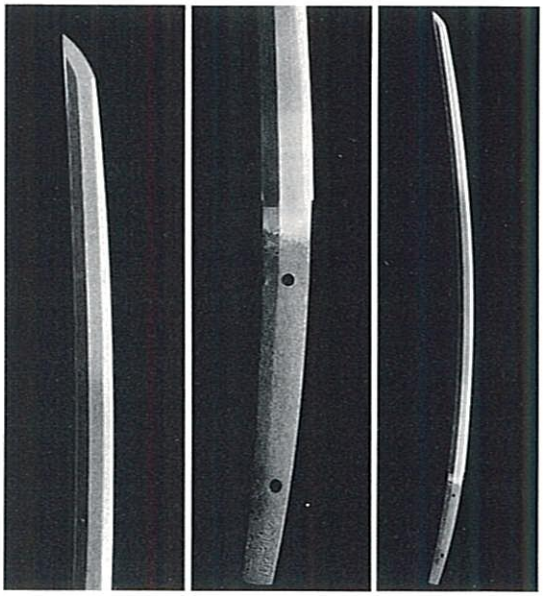
古刀時代の刀剣製作の中心は備前・山城・大和・相模・美濃の5か国であり、それぞれ特有の鍛練法を発揮し、備前伝・山城伝・大和伝・相州伝・美濃伝と呼ばれている。

その中でも、備前は中心的な位置を占めており、古刀時代全体を通じて多くの刀工が活躍し、勝れた刀剣を鍛えた。

また、備中も南北朝時代迄は日本有数の刀剣製作地であった。彼らの作った備前刀・備中刀には、銘文に製作年代を特定できる年紀が切り添えられていることが多く、一貫した流れを知ることが出来るため、日本刀の研究上、極めて重要な位置を占めている。このため、この特別展では、日本刀成立前については、〔1．日本刀成立前史〕として、県内外の資料によって弥生時代以来の刀剣の変遷を取り上げ、成立後については、〔2．日本刀の美と変遷〕として備前刀・備中刀に限って取り上げている。併せて、工芸技術の粋を凝らした刀剣外装についても、代表的なものを集め、〔3．刀剣外装とその美〕として取り上げ、また刀剣の変遷に係わる絵画や、主に江戸時代に刀剣の鑑定・研究のために作成された各種文献資料を加え、それらを通して日本の歴史、文化史上における刀剣のもつ意義について考えてみることにした。



重要文化財　太刀　銘備前国□□（伝友成）防府毛利報公会



県重文　太刀　銘正恒　岡山県立博物館

1. 日本刀成立前史

日本へ初めて朝鮮半島から銅剣・銅矛・銅戈が伝えられたのは弥生時代前期末頃のことであったといわれる。それらは鋭利な刃を持つ武器であったが、まもなく北九州や近畿地方などでも作られるようになると、刃も研ぎ出されず、薄手で、扁平な、武器としての実用性をもたないものに変っていった。これは、それらの青銅製利器が日本では武器としてよりも儀器や祭器として用いられたためであったとみられている。古墳時代になって鉄剣や大刀が武器として広く使用されるようになっても、刀剣はまた同様の役割をもっており、刀剣は後世に至るまで日本人の精神生活と深い係わりをもってきた。

古墳時代には、はじめ鉄剣が多く、中期以後大刀が圧倒的に増えてくるが、その大刀は大陸様式の直刀であった。今日、正倉院に伝わる大刀もすべて直刀であるが、平安時代になると、兵庫県・清水寺に伝わる大刀のように浅い反りをもつ大刀やはばき元でくの字形に反る蕨手刀・毛抜形太刀が出現する。ここに日本刀の萌芽が見られる。これは、この頃から騎馬戦が多くなったことと係わりがあるとみられているが、武士が出現する平安時代後期になると、鎬と反りをもつ日本刀が誕生する。この展示では県内外の資料によって日本人の精神生活と刀剣との係わりや、日本刀が成立してくる過程について紹介している。

2. 日本刀の美と変遷

日本刀が成立した平安時代後期から古刀時代を通じて備前・備中はその製作の中心であり、多くの名工を輩出した。

平安時代後期から鎌倉時代初期にかけては、古備前派や古青江の刀工が優雅な形姿の太刀を造り、幕府政権が安定してくると、備前では福岡や長船、畠田を中心に一文字派・長船派、畠田派等の刀工が活躍、武士の気風を反映して太刀姿や刃文に豪壮華麗な作品を残した。青江刀工もまた縮緬肌と呼ばれる地鉄に特色を発揮した。鎌倉時代後期から南北朝時代には、文永・弘安の役の体験から重ねが薄く、身幅の広い、大鋒の太刀が主流となり、備前では長船派正系のほか長義一門、吉岡一文字、吉井派、宇甘派、備中では末青江の刀工が地鉄や刃文、太刀姿等にそれぞれ特色をもつ作品を生み出した。

室町時代になって京都に幕府が置かれると、太刀姿は比較的細身で鋒の小さい鎌倉時代初期の姿に近くなり、時代の風潮を伺わせるが、この頃には刀工は長船に集住するようになり、一方青江刀工は南北朝末期を境に姿を消す。

戦国時代になると、長船に集住した刀工は長船派を中心にますます隆盛となった。しかし、その作品は束刀とか数打物と呼ばれる粗製濫造品が増えた。それらなかで、武士たちの注文によって打たれたものには美術的にも勝れたものがあり、その銘はまた史料として貴重なものも少なくない。日本最大の刀剣製作地であった長船も江戸時代になると、わずかに横山祐定一門がその伝統を守るだけとなった。一方、備中では戦国時代末期に国重一門が現われ、江戸時代には備中のほか、一門の刀工は江戸・大坂等でも鍛刀した。しかし、横山祐定一門はもとより、国重一門も古刀時代の備前・備中刀工の栄誉を継承するには至らなかった。

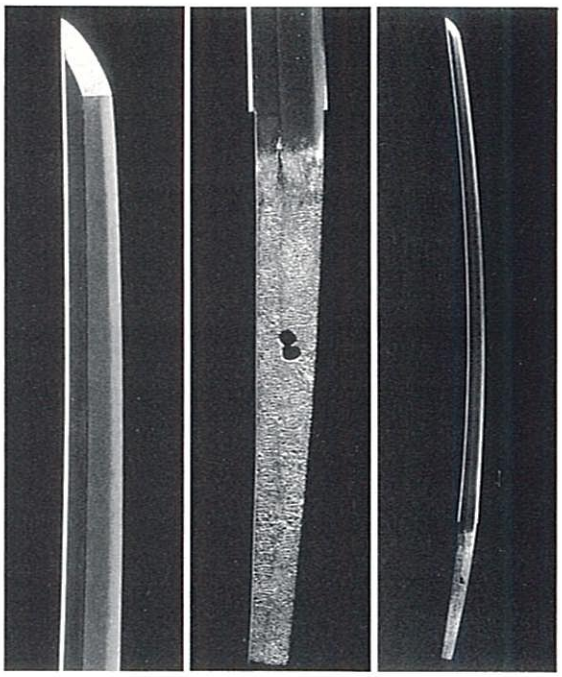
この展示では、こうした備前刀・備中刀の変遷と刀剣のもつ美について見るため、国宝の太刀・大包平を始め平安時代末期から江戸時代末期迄の各時代を代表する刀剣を集めている。また、刀剣は武士の魂ともいわれ、武士たちは名刀の収集に努め、そのため刀剣の鑑定・研究も盛んとなり、各種の資料が後世に残された。刀剣の理解に供するため、そうした資料も集めている。

3. 刀剣外装とその美

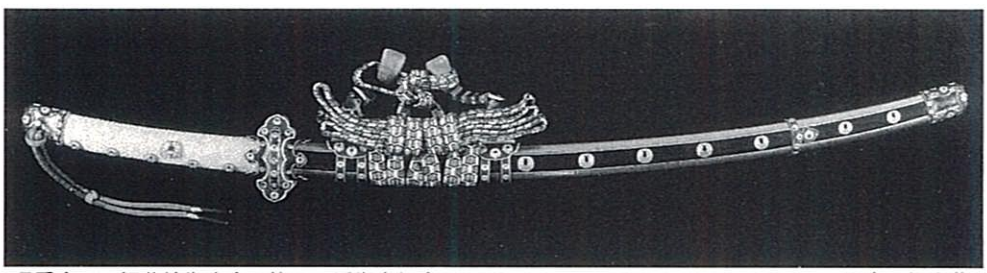
刀剣は弥生時代以来、実用の武器としてだけでなく、儀器や祭器としても重要な役割をもっていた。このため、その外装にも用途にふさわしいものが、各時代の工芸技術の粋を集めて作られた。文化の和風化が進んだ平安時代には太刀外装にも儀杖太刀と兵杖太刀が現れた。儀杖太刀には公家の好みを反映した優雅な飾剣や衛府太刀が用いられ、兵杖太刀には武士の実戦の体験と気風を反映した長覆輪太刀・兵庫鎖太刀・蛭巻太刀・糸巻太刀・黒漆太刀等が生まれた。また、小柄・笄をもつ腰刀も用いられた。戦国時代に打刀や脇差が用いられるようになると、腰刀の拵を取り入れた拵が使われ、江戸時代には打刀と脇差をセットにした大小拵が武士の正式な帯用となった。

こうした刀剣外装には、金・銀・金銅・赤銅・山銅等を用い技巧を凝らした装飾金具が用いられており、美術的な価値の高いものも少なくない。

このため、各種太刀拵を集めるとともに江戸時代を中心に鐔・小柄・笄・目貫を集めて展示している。



国宝　太刀　銘備前国長船住左衛門尉景光
作者進士三郎景政　埼玉県立博物館



県重文　　樋蒔絵衛府太刀拵　　近衛家伝来　　岡山・個人蔵

主な展示資料

◉国　宝
◎重要文化財
○県指定重要文化財

名　称	時代	所　蔵　者
石剣　愛媛県乳母懐遺跡出土	弥生時代	個　人
石剣〔複製〕愛媛県出作宝剣田遺跡出土	弥生時代	松山市考古館
銅剣　岡山市飽浦出土	〃	東京国立博物館
銅鉾　善通寺市瓦谷出土	〃	〃
○銅戈　御調八幡宮神山出土	〃	広島県　御調八幡宮
鉄剣　岡山市加茂遺跡出土	〃	岡山県古代吉備文化財センター
素環頭大刀　岡山県長船町花光寺古墳出土	古墳時代	東京国立博物館
金錯銘鉄剣〔複製〕埼玉県稲荷山古墳出土	古墳時代	埼玉県立さきたま資料館
装飾柄付大刀　総社市緑山17号墳出土	古墳時代	総社市教育委員会
頭椎大刀　岡山県北房町土井2号墳出土	古墳時代	岡山県古代吉備文化財センター
○金銅装環頭大刀　岡山県北房町大谷1号墳出土	古墳時代	北房町教育委員会
金銅荘環頭大刀〔複製〕高知県小村神社伝来	古墳時代	高知県立歴史民俗資料館
◎直刀　無銘	奈良時代	個　人
◎黒漆剣　無銘　伝坂上田村麻呂佩刀	平安時代	京都府　鞍馬寺
◎大刀　無銘　伝坂上田村麻呂奉納	〃	兵庫県　清水寺
◎毛抜形太刀　無銘　伝藤原秀郷佩剣	平安時代	滋賀県　宝厳寺
◎太刀　銘備前国□□(伝友成)	〃	防府毛利報公会
◎太刀　銘正恒　附黒漆太刀拵	〃	日本美術刀剣保存協会
◉太刀　銘備前国包平作　岡山池田家伝来(名物大包平)	平安時代	東京国立博物館
○太刀　銘正恒	〃	岡山県立博物館
◎太刀　銘宗吉	鎌倉時代	愛知県　熱田神宮
◎太刀　銘則宗	〃	岡山県立博物館
◉太刀　銘吉房(名物岡田切)	〃	東京国立博物館
◉太刀　銘一(織田信長遺物)	〃	個　人
太刀　銘一　備□吉岡住助（以下切）	〃	〃
◎太刀　金象嵌銘光忠　本阿(花押)	〃	東京国立博物館
◉薙刀　銘備前国長船住人長光造　津山松平家旧蔵	鎌倉時代	佐野美術館
◉太刀　銘備前国長船住左衛門尉景光・作者進士三郎景政	鎌倉時代	埼玉県立博物館
◎太刀　銘貞守	〃	佐野美術館
◎太刀　銘雲生	〃	東京国立博物館
◎太刀　銘康次	〃	〃
◎太刀　銘備前国長船兼光(一国兼光)南北朝時代		個　人
太刀　伝長義	〃	〃
太刀　無銘（青江）	〃	〃
◎太刀　銘備中国住守次作	南北朝時代	東京国立博物館
◎太刀　銘備州長船盛光	室町時代	山口県　忌宮神社
○太刀　銘備州長船幸景	〃	岡山県立博物館
○大太刀　銘秀幸	〃	岡山市　吉備津神社
大太刀　銘法光	〃	〃
短刀　銘勝光	室町時代	個　人
薙刀　銘勝光・祐定　宇喜多能家注文打	室町時代	〃
刀　銘源兵衛尉祐定　浦上宗景注文打	〃	〃
刀　銘横山上野大掾藤原祐定	江戸時代	〃
○宝剣　銘横山上野大掾藤原祐定	〃	備前市　鏡石神社
刀　銘水田住国重	大月与五右衛門	個　人
刀　銘逸見竹貫斎源義隆		倉敷市　羽黒神社
◎金銅鶴丸文散兵庫鎖太刀　鎌倉時代		愛知県　熱田神宮
◎黒漆太刀拵	南北朝時代	日本美術刀剣保存協会
◎黒漆銀銅蛭巻太刀	〃	東京国立博物館
○樋蒔絵衛府太刀拵	江戸時代	個　人
梨子地鳳凰螺鈿飾剣	〃	〃
棕呂毛塗鞘三葉葵紋金具大小拵　津山松平家伝来	江戸時代	〃
鐔　奈良利寿ほか　22枚	〃	〃
小柄・笄・目貫　後藤乗真ほか　6組	〃	〃
刀剣製作工程　一式	現　代	岡山県立博物館
研ぎ道具　一式	〃	個　人
女刀工大月源画像	江戸時代	〃
◎刀絵図　本阿弥光徳筆	桃山時代	山口県　防府毛利報公会
刀装図彙　6巻	江戸時代	岡山県総合文化センター
観智院本銘盡〔模本〕	原本・室町時代	個　人
長享銘盡	室町時代	日本美術刀剣保存協会
国々鍛冶銘盡	江戸時代	岡山大学附属図書館
古刀銘盡　7冊	〃	岡山県立博物館
星野求与本名物帳〔模本〕	原本・江戸時代	個　人
光山押形〔模本〕2冊	〃	〃
本阿弥家鑑定折紙	江戸時代	〃
古刀新刀銘鑑	明治時代	岡山県総合文化センター
古刀番付	〃	岡山大学附属図書館
新刀番付	〃	〃
鍛冶心得大意	江戸時代	個　人
国重由緒書	〃	〃
伴大納言絵詞〔模本〕1巻	原本・平安時代	東京国立博物館
平治物語絵巻〔模本〕1巻	原本・鎌倉時代	〃
賤ヶ岳合戦図屏風 6曲1双	江戸時代	滋賀県　長浜城天守閣
小牧長久手合戦図屏風　6曲1双	〃	大阪城天守閣

記念講演会

日時：2月6日（土）13：30～15：00

場所：岡山県立博物館講堂

講師：東京国立博物館　工芸課長　小笠原信夫氏

演題：「日本刀の美と備前鍛冶」

岡山県立博物館だより　No.39

発　行　日　平成5年1月20日
発　行　者　岡山県立博物館
館長　橋本泰夫
岡山市後楽園1－5
☎(岡山)272－1149